

多勢家は漆山地方の大地主で、明治から昭和にかけて県内でも1、2を争う、又全国的にも名を知られた製糸工場を経営していた。この建物は製糸業が最も盛んであった頃、大正11年に上棟式（棟札あり）を行い、最終的に完成したのは昭和に入ってからと言われている。主として爾前に訪れた外国人バイヤーのための接待用の建物であった。棟梁は地元の大工で鈴木吉助、黒沢仙助であるが、洋風部分は東京で作ったものを持って来て組み立てたと言われている。設計者は不明である。

大正14年の家相図（ほぼ建物は完成していたと見える）によると、敷地（宅地部分）の東端に東向き（南北棟）に茅葺きの大きな母屋があり、母屋の中ほどから西向きに廊下が伸び、その先にこの建物がある。従って、この建物は玄関はないが、廊下の突き当たりには中国風の両折戸があり、玄関の代わりとなっている。現在茅葺きの母屋は少し離れた場所に移築され、別の建物が建っている。

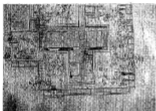
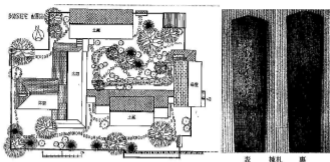
離れは南北に延びる平屋の和風棟と、それに直交し西方に延びる2階建ての洋風棟から構成されている。和風棟は北より15帖の座敷、12帖半の仏間、廊下を挟んで12帖半の茶室が並び、北面、東面、南面に4尺の縁を廻し、西面には床、床脇、仏壇、押入等が付く。材料は全て吟味した銘木を使用しており、障子や襖の枝にまで紫檀、黒檀の調を使用し、廊下と縁は幅2尺5寸程の榿の厚板を切目に使用している。又、座敷と仏間境の横間には長さ2間半の一枚板に透かし彫りを施している。

洋風棟の1階部分は、風呂、便所、洗面所、休憩室等からなるが、造りは和風である。約10帖程の風呂は、床と腰壁が大理石のモザイク貼、壁は桧板貼、天井は四角型の化粧天井とかなり変わった造りとなっている。1階階段室から洋風となり、踊り場の窓にはステンドグラスが嵌め込まれている。2階は完全な洋風で、語間と寝室より構成される。約38㎡（21帖）の語間は南面に大理石造りの暖炉（電気式）、北面に飾り柱を付けたニッチ、西面に小さなテラスへ出るドアがあり、いずれもその両脇に上げ下げ窓を付ける。東面は廊下（階段室）と寝室へのドアがある。廊下へのドアにはベデメントを付け、天井は折上げ格天井でコーブとコッファーには絵が描かれている。壁は飾り額付きのクロス貼、床は木製モザイクタイルの上に絨毯が敷かれている。6帖程の寝室も同様の造りであるが、北に面した窓の上にドーム窓が載る。

洋風棟の外壁は下見板貼り、屋根は銅板葺き寄棟造りで、西面にドーマーが付く。又、和風棟屋根の東端に縁台（風置台）が付く。2階階段室よりこの縁台に上れる。和風棟は母屋並縁板であるが、洋風棟・和風棟いずれも洋風小屋組みを使用している。

母屋と離れを繋ぐ廊下の南端には土蔵と、それを挟んで和室が2部屋ある。廊下の北側即ち、母屋と廊下と離れの和風棟に囲まれて湧き水を配した和風庭園があり、その奥に土蔵が見える。敷地はもっと広大なものであるが、これらの一面は宅地として板碑で囲まれており、洋風建築に対する洋風庭園は見られない。

この建物の建築費は当時の金で20万円とも言われており、和風棟は高価な銘木を惜しげもなく使用した豪華な造りであり、洋風棟も本格的なものであり、当時としては最新の設備を備えている。建築当時の豪傑・製糸関係業者の繁栄ぶりを実感させる貴重な建築であると言える。（西野）



原相図（大正14年）離れ部分



原相図（大正14年）住宅部分



原相棟南西面外観



高と和風様

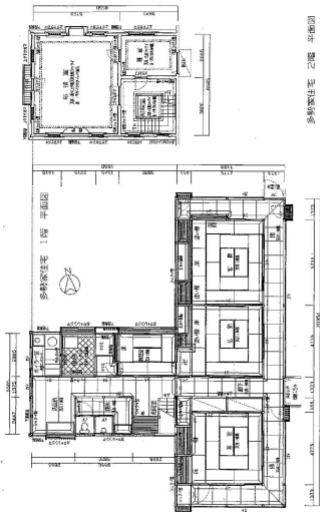


和風南面外観



庭と北面の土蔵

图四六 图乙 宝升源铺面





客間西面、床、窓



客間南面、障子



客間北面、書院



仏間西面、仏壇、床、本棚



応接室北面、ニッチ



応接室西面、観音



階段より見た本館出入口扉



寢室北面、上げ下げ窓



小屋根